新版 指導要文集

しんぱん

しどうようもんしゅう

だいにしゅう

じっせん

第二章 実践

ほとけ ま

仏と魔

ほとけ だいば
仏と提婆とは身みと影かげとのごとし。

しょうじょう 離
生々にはなれず。

005 開目抄
かいもくしやう

ほとけ ま
仏と魔 111 ページ 10 行

鬼きをだつみばよう奪命者しやという。魔ま入いつてくどく功德くどくをうばう。魔まをだつばだつ奪だつ者しやとくどくいう。

(045 木もく絵え二に像ぞう開眼かいげん之の事こと)

仏ほとけとま魔ま
664 ページ 13 行

「鬼」^きとは、「奪命者」^{だつみようしや}（命を奪う者）^{いのち うば もの}にして、「奪」^{だつ}
功德者^{くどくしや}（功德を奪う者）^{くどく うば もの}と云うなり。

（095 御義口伝^{おんぎくでん}）

仏^{ほとけ}と魔^ま
1044 ページ 9 行

「もし衆生しゆじよう、生死しようじを出いでず、仏乗ぶつじようを慕したわずと知しらば、魔ま

は、この人ひとにおいて、なお親おやの想おもいを生しょうず」
（107種々御振舞御書しゆじゆおんふるまいごしよ）

仏ほとけと魔ま
1236 ページ 1 行

ただし、一闡提人と申して、いつせんだいにん もう 謗法の者ばかり地獄守に留め
かれ 生 広 彼らがうみひろげて、いま よ にほんこく いっさい 今の世の日本国の一切
しゅじょう 衆生となれるなり。

(122 さどごしよ 佐渡御書)

ほとけ ま 仏と魔
1288 ページー11行)

ほっけしゆう　こころ　いちねんさんぜん

しようあく

しようぜん

みようかく

くらい

法華宗の心は一念三千なり。性悪・性善、妙覚の位

そな

がんぼん

ほっしょう

ぼんてん

たいしゃくとう

あらわ

になお備われり。元品の法性は梵天・帝釈等と顕れ、

がんぼん

むみよう

だいろくてん

まおう

あらわ

元品の無明は第六天の魔王と顕れたり。

じびようだいししようこんじついもく

(139 治病大小権実違目

ほとけ　ま

仏と魔 1331 ページー12行)

ほけきよう

にちれんだいしようにん

ぶつぼう

ほうもん

こころ

いちねんさんぜん

法華経（日蓮大聖人の仏法）の法門の心とは一念三千であ

ぜん

あく

みようかく

くらい

ほとけ

り、したがって善も悪も妙覚の位の仏であつてもそなえている

がんぼん

ほっしょう

だいぼんてんのう

たいしゃくくてんのう

しよてん

のです。そして元品の法性は大梵天王、帝釈天王などの諸天

ぜんじん

がんぼん

むみよう

だいろくてん

まおう

善神としてあらわれ、元品の無明は第六天の魔王としてあらわれ

るのです。

魔まの習ならいは、善ぜんを障さえて悪あくを造つくらしむるをば悦よろこぶことに
候そうろう。

(140 常忍抄じょうにんしやう)

仏ほとけと魔ま
1336 ページ 12 行

とうがく ぼさつ
たとい等覚の菩薩なれども、元品の無明と申す大悪鬼身に
い ほけきよう もう みようかく くどく さ そうろう
入って、法華経と申す妙覚の功徳を障え候なり。いか
い げ ひとびと
にいわんや、その已下の人々においてをや。

(171 兄弟抄

きようだいししよう

ほとけ ま
仏と魔
1472 ページ 7 行

さんしょう

もう

ほんのうしょう

ごうしょう

ほうしょう

ほんのうしょう

三障と申すは、煩惱障・業障・報障なり。煩惱障と

もう

とん

じん

ちとう

しょうげしゅつたい

ごうしょう

申すは、貪・瞋・癡等によりて障礙出来すべし。業障と

もう

さいしとう

しょうげしゅつたい

ほうしょう

もう

申すは、妻子等によりて障礙出来すべし。報障と申す

こくしゆ

ふぼとう

しょうげしゅつたい

は、国主・父母等によりて障礙出来すべし。

(171 兄弟抄

きょうだいしやう

ほとけ

ま

仏と魔 1480 ページ 1 行)

さんしょう

ほんのうしょう

ごうしょう

ほうしょう

三障というのは、煩惱障・業障・報障のことです。

ほんのうしょう

とん

じん

ち

ほんのう

ぶつごうしゆぎやう

煩惱障というのは、貪・瞋・癡などの煩惱によつて、仏道修行

しょうがい

ごうしょう

をさまたげようとする障害があらわれるのです。業障というの

つま こ

しょうがい

ほうしょう

は、妻や子どもなどによつて障害があらわれることです。報障と

こくしゆ ふぼ

しょうがい

いうのは、国主や父母などによつて障害があらわれることです。

だいろくてん まおう じゆうぐん 戦 起 ほけきよう ぎようじや

第六天の魔王、十軍のいくさをおこして、法華経の行者

しょうじかい かいちゆう どうごえど 取 奪

と生死海の海中にして、同居穢土を、とられじ、うばわ

争 にちれん み 相 当 たいへい 起

んとあらそう。日蓮その身にあいあたりて、大兵をおこし

にじゆうよねん にちれん いちど 退 こころ

て二十余年なり。日蓮、一度もしりぞく心なし。しかり

でしとう だんなとう なか おくびよう 者

といえども、弟子等・檀那等の中に、臆病のもの、大体

落 たいてん こころ

あるいはおち、あるいは退転の心あり。

べんどのならびにあまごぜんごしよ

(227 弁殿 並 尼御前御書

ほとけ ま

仏と魔 1635 ページー6 行)

だいろくてん まおう じゆう まぐん お ほけきよう ぎようじや げんじつ

第六天の魔王は、十の魔軍を起こして、法華経の行者と現実

せいし くのう

せかい

ぼんしょうどうご

ほとけ

ぼんぷ

いっしょ

の生死の苦悩うずまく世界にあつて、凡聖同居（仏と凡夫が一緒

えど しゃばせかい

うば

あらせ

にいる）の穢土（娑婆世界）をとられまい、奪おう、として争つて

にちれん だいろくてん

まおう

たいけつ

もの

ま

いくさ

いるのです。日蓮は第六天の魔王と対決する者であり、魔との戦

お たたか

にじゅうすうねん

あいだ

にちれん

いちど

を起こして戦うこと二十数年になります。その間、日蓮は一度

しりぞ こころ

でし

しんじゃ

として退く心はありませんでした。しかしながら弟子や信者たち

おくびよう もの

たいてん

たいてん

こころ

のなかで臆病な者はだいたいが退転するか、もしくは退転の心

があるのです。

ほけきよう

か

つ

しやかぶつとう

じつぼう

とかくして法華經に懸かり付きぬれば、釈迦仏等の十方の

ほとけ みこ

たま

ぼんのう

たいしやく

おそ

よ

仏の御子とせさせ給えば、梵王・帝釈だにも恐れて寄り

つ

だいろくてん

まおう

まおう

さき

付かず。いかにいわんや、第六天の魔王をや。魔王は前に

しゆ

いま

うやま

おそ

悪

は主なりしかども、今は敬い畏れて、「あしゆうせば、

ほけきよう

じつぼう

しよぶつ

ごげんざん

い

法華經・十方の諸仏の御見参に、あしゆうや入らんずら

おそ

かしこ

くよう

ん」と恐れ畏みて供養をなすなり。

じようぞうじようげんごししようそく

383 浄蔵浄眼御消息

ほとけ

ま

仏と魔

2008

ページー8行

だいろくてん まおう

み おどろ い

浅

第六天の魔王、このことを見て驚いて云わく「あらあさ

もの くに あと とど

彼 わ

ましや。この者、この国に跡を止むるならば、かれが我が

み しょうじ 出

ひと みちび

身の生死をいずるかはさておきぬ、また人を導くべし。

こくど 押 取 えど じょうど

またこの国土をおさえとりて、穢土を浄土となす。いかん

よく しき むしき さんがい いっさい けんぞく

催

がせん」とて、欲・色・無色の三界の一切の眷属をもよお

おお くだ い おのおの 能 々 したが

し、仰せ下して云わく「各々のうのうに随つて、かの

ぎょうじや 悩 叶 かし

行者をなやましてみよ。それにかなわずば、かれが弟子

檀 那 こくど ひと こころ うち い 替

だんなならびに国土の人の心の内に入りかわりて、ある

諫 脅 かな

いはいさめ、あるいはおどしてみよ。それに叶わずば、我

われ

みずから自うちくだりて、打国主の身心こくしゆ しんしんに入りいかわりて替おどし脅
てみんな、いかでか止とどめざるべき」とせんぎし僉 議候そうろうな
り。

(385 三沢抄 みさわしやう)

仏ほとけと魔ま
2011 ページー10 行